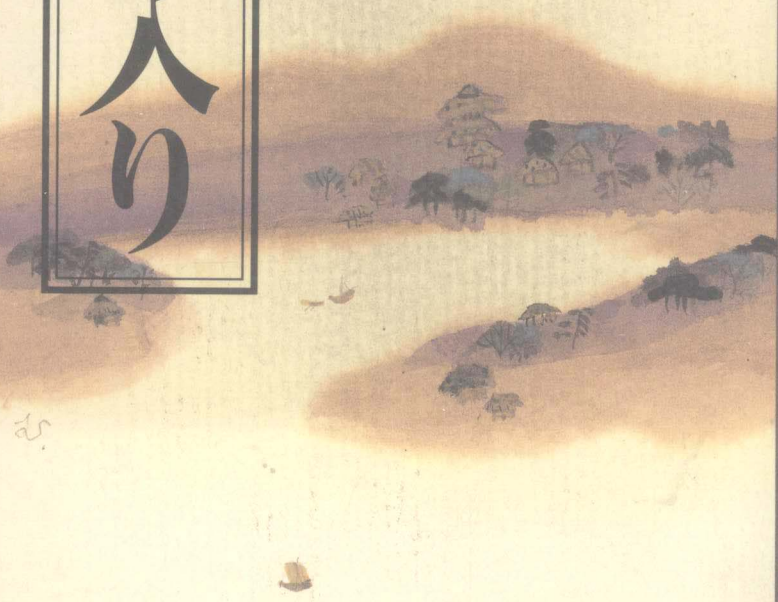




半村良

江戸打入り



江戸
打
入

江苏工业学院图书馆
藏书章

半
村
良

集英社

江戸打入り

著者 半村良

一九九七年 八月 一日 第一刷発行

発行者 小島民雄

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇 千一〇—一五〇
電話〇三—三三〇—六一〇〇（編集部）三三〇—六三九三（販売部）
三三〇—六〇八〇（制作部）

印刷所 廣済堂印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

定価はカバーに表示してあります。

©1997 Ryo Hamura. Printed in Japan ISBN4-08-775211-9 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複製・写複製することは法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

目次

三河の風

7

浅黄の隊列

39

富士の白雪

75

棕櫚と舟橋

115

江尻馬揃え

155

関白御成橋

195

茶屋と禅僧

215

小田原の春

237

虎口ここうの番人

259

疑惑の総攻撃

299

江戸打入り

321

装画 村上 豊
装丁 岡 邦彦

江戸打入り

三河の風

このところ晴れた日がつづくが、風は冷たい。雪を覚悟する季節である。

川沿いの道を行けば、その先は急な登りになっており、道は山の木々に包まれてしまうのが見える。

川はその山を避けるように、左へ大きく曲がって道から遠のいている。少し走って跳べば飛び越せるほどの川幅だ。

その川の向こうは畑だ。道と同じに川に沿い、細長くつづいているが、いまは風に震える枯草のあいだから、乾いた土が見えるだけだ。

何年に一度か、その川が増水して道に溢れだすことがある。だから家は道の右手の小高い場所に、山を背にして建てられていて、その家の門まではゆるい登りの道がついており、途中の左手にふたかかえもある大きな楠が葉を茂らせている。

門はあきらかに長屋門だが、門の右側がない。壊されたようだ。そのかわりに腰の高さほど

の竹垣が組まれていて、その隅に白壁の破片らしいものが積まれている。

門の左半分は下見板張りの腰壁に白壁、連子窓という、長屋門らしい構造が残っている。門扉はなく、その奥に板葺き屋根が見えている。

屋敷地の広さや構えは名主、庄屋の住まいを思わせるが、長屋門の荒れようや活気のなさは、その没落した姿を感じさせる。門の内の広い庭に動くのは、十羽ばかりの鶏だけだ。

板葺き屋根には石を置き、大戸の横には出格子をはさんで式台があるが、雨戸が引かれていて久しく使われた様子がない。

家全体は格式のある本棟造りだが、それだけに家運の衰えが見え、北風のせいばかりではなく、うそ寒い風情だ。

中で音がしている。機^{はた}の音だ。大戸を入ると土間囲^{いり}炉裏^りが目につく。その横に火口が四つ並んだ竈^{かまど}が黒々と据えられている。

大戸を入った右、出格子のあたりには、薙刀^{なぎなた}と三つ爪の熊手が、下り藤の家紋をつけた楯とともに、無造作に並べられている。

柱も梁も太く古びて重々しいが、戸、障子などは新しく、閉じられた玄関の側は板襖で仕切られている。機の音はその中で続いていた。

女が板襖をあけて姿をあらわす。着古した縞^{ぬい}の布小に幅広で朽ち葉色の前垂れをつけ、髪はひろげた手拭で覆っていた。

土間へおり、藁草履をはいて手桶を二つ持つと、竈^{かまど}のそばを通って障子をあげ、外へ出て行

く。井戸で釣瓶を引き上げる音がはじまり、すぐ水音にかわった。

「日が陰ってきたで、目を損ねるがね。まあ、やめよかねえ」

女の声がして、何人かが動きだす気配だ。御上と呼ばれる板敷きの客間で、三人の女たちが縫い物をかたづけしている。四人目は高機たかはたから離れるところだ。同じ織機がもうひとつあり、水汲みに出た女が使っていたらしい。

東側の障子を開け放ち、いちばん年嵩としかさの女が前垂れをかかえるようにして濡れ縁へ出ると、ばたばたと前垂れを払った。

ほかの女たちも濡れ縁へ出て並び、しばらく遠くの山を眺めていた。機織りや針仕事をする者は、ことのほか目を大切にするのだ。

「寒い寒い。はよ、火を焚こまい」

一人がそういつて御上おへから土間へおりて行く。客を迎えるための板の間が、女たちの仕事場に使われているのだ。

濡れ縁から中に戻った年嵩の女が障子をしめた。歳は五十前後。小太りできつい目をしている。この家の後家で名はよね。しっかり者で手八丁。ことに糸や布をいじらせたなら右に出る者なしという、評判の高い女である。

女たちがみな土間へ移る。

「七しちきが割った薪は使い易やすて助かるがね」
竈かまどに火をつけながら言う女も後家で、たつという名だ。

「丹念な割り方をするでねえ」

そういう女も後家。名はさき。囲炉裏いゝりで柴を小さく積みながら、

「細いのと太いのに分けておいてくれるもんで」

というつねも後家だ。それを聞きながら大戸をあけて外へ出た背の高い女は、よねの娘で名はえん。歳は二十二になるが嫁にも行かず、いまでは行かず後家と陰口する者もいなくなつてしまつた。

この家の女たちは染めや仕立ての名人ぞろいだ。絹はもとより藤布ふじぬのや木綿など、織りさえもやつてのけ、小袖の綿の出し入れなど、手早さをきそうようにしてのける。

その上五人そろつて後家。一人だけ行かず後家がまじるが。

その行かず後家は庭で薙刀をふるっている。我流だが気合いは鋭い。万一の場合には、その薙刀で家を守ろうというのだろう。

何度か振つてその風音に満足したらしく、薙刀をかかえて家の中へ戻つたが、そのとき坂を門に向かつて近づいてくる者がいたのには気づかなかつた。

扉のない門を抜けて庭にあらわれたのは僧である。僧衣の襟元に白絹を巻きつけ、左手に包みをさげていた。

「御免」

大戸の前に足をとめ、噎れた声をかけた。

いま薙刀を抱えて入つた背の高い女が、すぐ障子をあげ、

「和尚さま」

と驚いたような声をあげる。

「和尚さんじゃと……」

囲炉裏のまわりにいた女四人がいつせいに大戸のほうへ顔を向けた。

「妙念さま」

「妙念和尚さん」

女たちの表情が明るくなる。僧は女たちに慕われているというより、なつかれているといった風情だ。

「おうおう、顔揃えておるな、後家どもが」

大戸を入った妙念は、囲炉裏へ近寄りながら左手の包みをさしだす。

「これ土産だわ。米麴だがや」

「これはこれは、かたじけのう存じます」

よねがそれを両手で受けておしただく。

「えらい寒なつたのう。まあすぐ雪も降るだらあよ」

よねは妙念から受け取った米麴の包みを、そばにいたつねに手渡し、妙念を土間囲炉裏のそばにすわらせる。

「寒うございましたでしょう。白湯でもお上がりん」

「いや、薄荷湯がええわ。この家に來たら薄荷湯だがや」

「ありゃあ秘伝の油だがや、あんまり世間にひろめんでくださいまし」

よねはそういいながら立ち上がって、棚からその油を取り出す様子だ。

「行かず後家どのは、まんだ薙刀の稽古を続けとるようじゃな」

「行かず後家ちゃ、なにを言やあす。行こうにも受手がおりゃへん。日がな一日針仕事では、体がなまりますもんで、薙刀の音を楽しんどるんですわ」

えんは妙念をたしなめるようにいつてそばへすわった。

「薙刀の音ちゃ、どんな音するだ」

するとえんは唇を尖らせて、ヒューツと鋭い音を聞かせた。

「^{おまが}危い風音や」

「鋭く振りゃあ鋭く鳴るわ」

「そんじゃあ受手がおらんわけだわ」

そこへよねが湯気のたつ茶わんを持ってくる。

「ご所望の薄荷湯でございます」

「おう、これだわ、これ」

妙念は両手で茶わんを受け取り、軽く頭をさげて見せてからひと口する。

「口ん中がすつとするわ」

秋、山に入ったついでにその草をみつけると摘んできて、葉や茎からとれた油を、湯にひとしずくたらしめて楽しむのだ。知る者も少なく、よねたちは秘伝の油と称して大切にしている。

「この茶わん持って、奥へ行こまいか。およねさとおえんさに、ちつと話があるでよ」

妙念がそういうと、母子は顔を見合わせ、えんが気付いて、

「なら、濯ぎを持ってまいりますわ」

と立ちあがり、妙念は茶わんを手にして一段高い板の端に腰をおろした。

「草鞋をお脱ぎんされ」

つねが近寄って妙念の草鞋を脱がせにかかる。

「おう、極楽極楽」

妙念は茶わんを手放さずに片足をあげて満足そうだ。

「和尚さんでも男は男。男に触れるのはやつかめだわ」

草鞋を脱がせて足を洗ってやりながら、つねが足の裏を擦った様子。

「こら、やめよや。せっかくの薄荷湯がこぼれてまうがや」

妙念は体をよじって悲鳴をあげた。

仏壇に阿弥陀如来像が見える。仏壇は板壁の中央に据えてあり、左右の白布を敷いた台の上に、位牌がずらりと並べてあった。

妙念は仏壇に向かって合掌しおえると、灯明を手で煽って消し、左右の位牌に低く経を唱えながら合掌を向けると、母子のほうへ向きなおった。

その膝元へえんが湯氣のたつ茶わんを置く。

「金七のことだな」

妙念がそういうと、よねは予想していたようにうなずいてみせた。

「あの坊を失^{うしな}やあ、この家は絶えてまう」

妙念はそういつてよねをみつめた。

「たんと失ったなあ。あの子だけは残^{のこ}りたいがや」

それは妙念に対する答えというより、よねの願いのほとばしりだった。

よねは仏壇の左右に並んだ位牌の列に目をやる。左側に並べてあるのはよねの子供たちの位牌だ。金一郎、金次郎、金三郎、金四郎、金五郎、金六郎。仏壇の阿弥陀如来像の一段下に置かれてゐるのは、よねの夫金兵衛の位牌だ。

「十六で嫁にきてよお、三年つづけて子を産んだんだわ。そのあと一年あけてまた年子^{としご}。また二年あけて金六を産んだのは二十五の歳じやった。爺^{じい}さも婆^ばさも、家の栄えをもたらず女子^{おなご}だちつて、そりゃあよろこんでくれたもんだったわ」

よねの表情が暗くなる。

「わしもうれしかったわ。子育てはえらかったが、みなすくすくと育ってくれたし、親よりさき死ぬ子はおらん思うとった」

よねはまた位牌の列に目をやる。

「ところがこのありさまだわ。八人産んで六人死なせちまったで。栄えをもたらず女子どころ